



～取組の成果を示すとき～

この時期は、学習発表会、文化祭、公開研究会など、学校のこれまでの取組の成果を示す機会が目白押しです。学校が一丸となって、一つの目標の達成に向けて取り組んでいる姿を、地域や保護者の方々にしっかりと見ていただき、子どもたちの成長、先生の頑張りを伝えていただきたいと思います。

一方で、大きな行事だけでなく、日々の教育活動の積み重ねが、そのような大きな行事を成功させることも間違いありません。

本市では、今年度から「つながり支援プロジェクト」に取り組み、学校の教育活動の中で、意図的に子ども同士が関わる場を設定し、安心の欲求や交流の欲求を満たして、自己有用感を育てています。

今回の市教委だよりには、授業における「自己有用感の育成」を紹介しています。

教育委員が学校を訪問しました

本市では、昨年度から教育委員による学校訪問を実施しています。これは、教育委員が、児童生徒の日頃の様子を観察したり、教職員と直接対話したりすることで、学校の状況を把握し、今後の教育施策に生かすことを目的としたものです。9月4日（金）の友和小学校への訪問については、前号の市教委だよりで紹介したとおりですが、10月2日（金）には、大野東中学校へ訪問しました。

校長、教頭、教務主任から、生徒の様子などについて説明を受け、その後各教室で生徒と一緒に給食を食べながら日頃の学校生活について話をしました。給食後は授業を参観し、特に音楽の授業での生徒の美しい歌声に心を打たれました。参観後、教育委員からは「子ども達が皆大きな声で挨拶をしてくれた」「授業は概ね落ち着いた雰囲気で行われていた」などの感想が述べられました。



平和の大切さを未来につなぐメッセージ

戦後70年を迎え、将来を担う子どもたちに改めて平和を希求する心を継承していくために、家族で平和について語り合う中で作成した子どもたちのメッセージを募集しました。

最優秀賞、優秀賞ともに作品集として製本し、各学校に送付します。また最優秀賞受賞者については、11月8日に市長から直接表彰状を手渡されます。ここでは、川柳部門の最優秀作品を紹介します。

宮内小学校 1年 橋詰 昊晴 (はしづめ かいせい) 「へいわはね みんなといっしょに いきること」

大野東小学校 3年 山田 彩愛 (やまだ さいら) 「つたえたい そ父の体けん そ母の思い」

地御前小学校 5年 久保 佑紗 (くぼ ゆうさ) 「手をつなぎ 平和をつなぐ 一つの輪」

七尾中学校 1年 岩崎 和奏 (いわさき わかな) 「受け取った 平和のバトン 未来へと」

作文部門の最優秀賞受賞者や作品は、市のHPで改めて紹介します。協力いただいた皆様、ありがとうございました。

おいしくて、心に残るメニューでした！

10月18日から10月24日、「ひろしま食育ウィーク」として、20日（火）には吉和学校給食センターで、21日（水）には廿日市学校給食センター、友和小・津田小・佐伯中・大野東小で、22日（木）には宮島学校給食センターで、それぞれ「ひろしま給食」のメニューを提供しました。献立は「まんさい！ひろしまご飯」「揚げ豆腐のあんかけ」「お宝甘けん汁」「牛乳」でした。

この取組は、広島県産・地元廿日市産の食材をたっぷり使って、子どもたちの心に残る給食を提供しようと、学校栄養職員、栄養教諭の皆さんがメニューの選定、試作、試食と日常の業務を行いながら知恵を出し合い、工夫をこらして実施されたものです。

子どもたちからは、「まんさい！ひろしまご飯は広島菜のシャキシャキ感と、タコの食感があっておいしかったです」「揚げ豆腐のあんかけは、おいしかったです。どうやって作ったのかを知りたかったです」「お宝甘けん汁は、汁にもアサリの味がして、おいしかったです」等の感想が聞かれ、また給食を作ってくださった職員の方へ、「本当においしかったです。味は最高でした。これからもおいしいごはんを頑張って作ってください。」とメッセージを書いている児童もいました。

またこの期間中に試食会を実施した学校では、参加した地域の方から、「食育はとても大事な教育の1つだと思います。給食の内容もさることながら、食べ方、姿勢、マナーも併せて子どもたちに接しさせてもらいました」と、この取組の大切さを理解していただいている感想が聞かれました。

「ひろしま給食」実施日の献立

<p>主食</p>  <p>まんさい！ ひろしまご飯 (ひろしま給食統一メニュー)</p>	<p>主菜</p>  <p>揚げ豆腐のあんかけ (廿日市統一メニュー)</p>	<p>副菜</p>  <p>お宝甘けん汁 (しょうゆ味) (廿日市統一メニュー)</p>	 <p>牛乳</p>
--	--	--	--

廿日市産のアサリ、野菜入り！

津田小学校4年生が頑張りました！

10月29日（木）、津田小学校4年生が地域にある横矢公園の緑化活動に参加しました。この緑化活動は、毎年地域の長寿会の方が取り組んでおられ、昨年は高校生が参加していましたが、今年は津田小学校の4年生が参加しました。4年生は今、社会科の学習で地域のお祭りについて学習をしているので、長寿会の方々とともに緑化活動をする中で、地域のお祭りのことについて、いろいろなことを教えてもらい、より一層地域に関心を持ったようです。花植えが終わった後は、横矢公園のそうじを行い、公園も心もきれいになりました。



自己有用感を育む授業を参観しました！

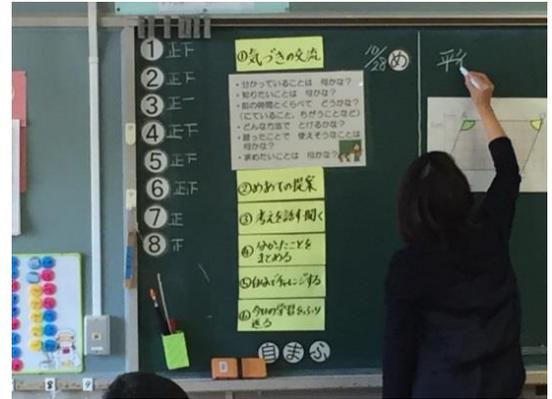
10月28日（水）に、広島県立教育センターの高田所長、坂本主任指導主事が佐方小学校5年2組の算数の授業を参観された際、市教育委員会も同行しました。佐方小学校は、今年度「学び合いの中で確かな学力を育む算数科学習指導の在り方」を研究主題として、廿日市市研究委嘱事業「授業づくり実践研究」に取り組んでいます。

導入・めあての提示

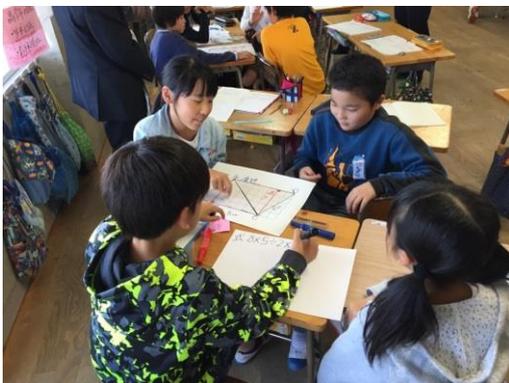
初めに角川瑠美先生が平行四辺形を提示し、気付きを促すと、児童は次々に平行四辺形の定義や性質を述べ、さらにそれが正しいことを実際に確かめました。

角川先生は、児童から今日のめあて「平行四辺形の面積の求め方を考える」を引き出して、「習ったことが使えないかな」と問いかけます。既習事項は、教室に掲示してあったり、ノートに貼ってあったりしており、児童は必要に応じてそれを見えています。児童からは「分ける（三角形に）」「ずらす（長方形をつくる）」「全体から部分を引く」等の考えが出され、自力解決のために角川先生はノートにメモを取らせませす。

児童たちは、もう取り組みたくてうずうずしています。すかさず角川先生が「できそうな気がしてきた？」と問いかけると、児童はみんな「はい！」と答えます。十分に自力解決への見通しが持っていました。



自力解決・小グループの活用



自分の考えを持った児童は、4人グループになって話し合い、大きなワークシートに書き込んだりしながら面積の求め方を追究していきます。どの班も頭を寄せ合って、全員が参加して話し合い、表情はきらきらしています。角川先生は、机間指導をしながら、各グループの考え方を把握したり、時には説明を聞いて助言したりしていました。あるグループが、「対角線で2つの三角形に分けた」けど、底辺を対角線に取り、高さを頂点から対角線への垂線に取ったため、長さが求められずに苦しんでいました。角川先生に「もう1枚ワークシートをください」とお願いして、みんなで考えた末、底辺と高さの取り方を変えることで長さが求められることに気付き、面積も計算できました。

全体での交流・まとめと振り返り

いよいよ全体での発表です。児童は黒板の前に立って説明することに慣れており、グループで前に出ると、しゃがんで指示棒で指し示すもの、みんなの方を向いて説明するもの、きちんと役割分担が出来ています。「まず、・・・」「～なりますね。ここまでのい
いですか？」などと相手意識を持って説明し、聞く方も「はい！」
「え？」と反応しながらしっかり聞いています。様々な考え方が説明されましたが、角川先生は、最初は底辺と高さの取り方がうまく行かなかったグループ、平行四辺形を2つの台形に分けて



長方形を作りたいかったけど、式までは思いつかなかったグループの考えを紹介し、よさを児童に伝えました。児童からも感心する声が上がっていました。

最後のまとめと振り返りです。児童が自分の言葉でまとめ、振り返り、みんなに伝えます。振り返りの場面では、台形に分けたグループの班長が「式まで行かなかった。僕は班長として、次の時間はみんなの考えを式でまとめたい」と述べたことが印象的でした。

授業後の懇談で、広島県立教育センターの所長、主任指導主事からは、児童が「グループの中で自由に考えを交流して、そこから意見をまとめている」「振り返りやまとめを自分の言葉で語っている」等の姿がとても良かったとの声、また先生が「誤答を意図的に生かして全員に理解させている」「子どもが主体的に授業に参加するよううまくファシリテートしている」点が参考になる等の声をいただきました。そしてこのような授業が、今県が進めている「学びの変革」が目指している授業であると評価していただきました。

佐方小学校の平岩校長先生からは、「廿日市市全体で、つながり支援プロジェクトに取り組んでおり、授業の中でも自己有用感を高めることを学校全体で取り組んでいる。児童がグループの中で自由に意見を言えるのは、安心の欲求が満たされ、意見を言っても馬鹿にされず、聞いてもらえるという安心感があるからできることである。その土台がなければ、学び合いのある授業はできない。最初はなかなかうまく行かなかったが、あきらめずに続けていくことで、徐々に形が整うようになってきた。今後も学校全体で学び合いのある授業づくりの取組を進めて行きたい」という説明がありました。

「つながり支援プロジェクト」では、子ども同士が関わる場を意図的に設定し、「自己有用感を育てる」取組を行っています。この授業の、どの部分が児童の自己有用感を育むのでしょうか。

まず、平岩校長先生の説明にもあったように、教室の中に「安心感」があり、どんな発言をしても、受け止めてもらえる、という受容的な雰囲気があります。その中で児童は「存在感」を感じ、全員が授業に参加するのです。

次に、授業の中で児童が「主役として参加」しています。この授業では、児童の言葉と先生の言葉の割合は、圧倒的に児童の言葉の方が多い授業でした。ほとんどの児童が発言して授業をつなぎ、自分の意見や発言が認められていました。

さらに、4人班では、児童がきらきらした表情でかかわり、交流欲求を満たす中で、授業に満足している様子が伺えました。

最後のまとめと振り返りでは、学んだことだけでなく、グループで関わったことや、友だちの頑張ったことにも触れ、自分が教室の中で役に立っていることを実感できる場がありました。

市教育委員会では、11月25日のプログレス研修（研究主任研修）を、佐方小学校の公開研究会と兼ねることとしています。本日の授業を始め、佐方小学校の取組を是非市内に広めたいと考えています。角川先生の貴重な授業をもとに、授業の中で自己有用感を育むためには、また思考力・判断力・表現力を育むためには私たちはどうすればよいのか、みんなで一緒に考えて行きたいと思います。

